随筆・評論

中島伸男
松室孝慧
山口育子
選

特選

二人三脚

日夏町
田中恵子

夫が家の階段から落ちた。あと少しの所、下から二、三段という所で左足を踏みはずしたようだ。夏の朝、四時頃のことで明るくなり始めた頃。私は二階のふとんの中で、ドスンという音を聞いたような聞かなかったようなで、何とも思わずそのまま寝入っていた。

夫は廊下に倒れ込んでうづくまっていたらしいが、半時間ほどで痛みが引き、何ということもなく普通に歩けたので、そのまま畑へ行った。七時頃帰ってきて、今朝階段から落ちたと言った。

「あんた、何回目や」

「三回目や、もう格好悪いし起こさんかったわ」

夫の左足の膝から下に三か所キズテープが貼ってあり、三か所とも血が滲んでいる。

「大丈夫か。今回は前よりひどそうやで。医者さんに行ったほうがよいで」

「大丈夫や、その内に治る。ちゃんと動けてる」

夫はその言葉通り、朝食の後もまた畑へ行き、昼からは用事があり自転車で出掛けた。

足は夕方より急激に痛み出したようだ。左足の甲が二倍近く膨れ上がり、足の裏を地に着けられない。地に着けたとたん激痛が走るという。足先に新聞が触れても「痛い」と叫んだ。トイレと風呂は這って行った。痛み止めを飲むと少し楽になったようだ。

「医者へ行った方がよいで。骨が折れているかもしれんで」

「大丈夫や、その内に治る。今までも治ってきた」と、夫は強気だ。私も治るような気もする。

次の日丸一日、痛み止めと家にあった湿布薬を繰り返す。ちょっと楽になったと思って立ち上ると「痛っ」という声が出た。二日目の夜も痛み止めを飲んで寝たが、ほとんど寝ていないようだった。

三日目の朝。

「医者さんへ行こうか」

「行ってみるわ」夫はやっとかぶとを脱いだ。

整形外科のある病院へ行く。駐車場から入口まで夫は私の肩につかまって二人三脚で歩いた。玄関先に置いてある車椅子を借りて、病院内を私が押した。レントゲンを撮ってもらう。

「大丈夫です。骨はきれいです。そうとうくるぶしの辺りがやられているなあ。しばらく安静にして下さい。動かすとその分治りが遅くなりますよ」と医者の言葉。補装具を付けてもらって、湿布薬をもらう。

その後三日間は、夫にしては医者の言葉を守ったと思う。家の外へは一歩も出ない。這って動く。歩きたい時は補装具を付け、私を呼んで私の肩を借りて歩く。夫の仕事であったゴミ出しも洗濯物の取り入れも私の役目になる。

しかし三日も過ぎると、何も付けずに歩いているのだ。

「補装具付けなあかんがな」
「あんな物付けたら余計に脹れる。反って痛みが出る。あの医者はヤブや」いつもの言葉が出る。実の所、私も補装具には良い思い出がない。実母が何年か前、捻挫した時も医者が補装具を付けるようにと言って、本人には付けられずというより付けるのを嫌がったため、毎朝付けに行き、寝る前にはずしたことがあった。結局一週間あまりしか続かなかった。それでもその内、母はすいすいと元通り歩いていた。

結婚して四十年、夫と私の生活サイクルは最初からずれていた。夫は太陽と共に起き出し、早々に寝てしまう。私は六時半頃やっと起き、夜はゆっくり楽しみたい。趣味も性格も違うが、何んとかここまで来られた。この先は二人が助け合わないとできないことが増えてくるだろう。

夫はその後半月ほど、昼間よく動くと夕方からは痛み出すということをくり返したが、自転車にも自動車にも乗れるようになり、機嫌良くなっていった。夫の痛みが和らぐと同時に私の左肩が痛み出した。湿布薬を貼っている内に私の肩も治っていった。

ひと月がたった。

夫は今朝も夜明けと共に起きていく。階段を下りる時は電気を付けるようになった。私は声をかける。

「ゴミ出し頼むで」

「分った」

夫は答えてくれる。

私はふとんの中で「ありがとう。また二人三脚せんでもよいように気を付けてな。まだ五時やんか。あと一時間はぐっすり寝られるなあ」とつぶやいた。

（評）結婚四十年の夫婦の日常生活が、生き生きとした会話を通して描かれる。夫の三回目の階段踏み外し事故を機に、これまでと、この先を述懐し、普段の生活を再開する、文章の展開が良い。生活サイクルも趣味も性格も異なる夫婦二人の生き方が、ユーモアの中に活写されている。

特選

パラソル・パラパラ

小野町　小野和子

九十四歳の母は、緑内障が進み、昨年二月に全盲になった。以前は蛍光灯を確かめ、襖（ふすま）をつたい、戸口へ来れた。近頃、明かりを見分けられないため、方向が分からず、用を足せない。

施設への手続きに四箇月かかった後、平成二十五年四月に創設された盲養護老人ホームへ、六月に入所することになった。

母にどのように伝えようかと、私は迷った。

「空気調節の設備で、うちのように寒くない。個室に手洗いもある。食事はごちそうや」

母は床に起き上がり、黙っていた。しばらくして、こちらへ顔を向けて言った。

「そこへ行くわ」

落ち着いた声だった。

鈴鹿山系を源とする芹川が湖東平野へ流れるほとりにホームがある。入所の一日目に、私は食堂で昼食の時間を見学した。職員が視覚障がいを持つ皆に説明する。

「お茶は一時の位置です。五時の位置は、

けんちん汁で、六時の所がご飯です」
時計回りのイメージは分かりやすい。次は口の体操だ。唾液の出がよくなり、飲み込みやすくなるそうだ。
「パラソル・パラパラ・パペピプペポパ」
スタッフの声に、皆が復唱する。母は「パピプペポ」と反復している。
「凧揚げ楽しい・タテチツテトタ」
カ行とラ行も、入所者三十人が熱心に声を出す。母は食事をこぼさずに全部食べた。
部屋へ戻り、床の枕元に母の日記帳とボールペンを置いた。母は日記を大事にしている。「今、書く」と、ペンを持ち「パピプペポ」と書いた。片仮名に付く丸が、円形に閉じている。私は感心して、母の耳元で告げた。
「丸がきちんと円になってる。つなぎ目が離れていない」
初めて気が付いたが、半濁音に付く丸は、何だかプクプクと上へ登っていくようで楽しい。

入所から九箇月経った。自宅からホームまでの道のりの季節がほぼ一巡りした。市内の東を囲む佐和山と笹尾山の間の旧道を辿り、鳥籠山（とこのやま）の麓で道を曲がる。川の上流へ遡る堤の正面に鈴鹿嶺が連なる。二月の後半、嶺は薄い藍色に透き通っていた。ここからバイクを十分も走らせるとホームに着く。
玄関まで水琴窟の音が聞こえる。廊下のT字路を示す音だ。各部屋の名札は、木片を磨いたもので、木目がゆかしい。名前はみな、毛筆の書体だ。母の名はスガだ。片仮名も毛筆で記されると、ただの直線でなくなる。母の個室は一号室だ。
一号室の戸を開けた。母が居ない。掛布団が斜めにめくれ、枕がずれている。何か起きた。手洗いの中の気配に戸を開けると、母が踞っていた。
「身体中……えらい。背中を叩いて」
十五分間母の様子を見て、私は呼び出しのベルを押した。職員と看護師さんが来て、施設の嘱託医に連絡がとられた。
熱が高い。私は母の部屋に泊り、指示された通りに清涼飲料水を飲ませ、背中を軽く叩き続けた。
「あぁ、えら。あぁ、えら」
と繰り返し母はつぶやいた。
三日目の朝、看護師さんは検温を済ませ、笑顔で私を振り返り、母の手を取った。
「よかったぁ。スガさん、熱が下がったよ」
母はひと回り小さくなったような気がする。小顔になり、皺が深くなった。体重は二十九キロだ。
平成二十六年の春の桜が、ホームの門から玄関まで満開だ。桜の時節に母が語る思い出が一つある。命終の舅が「桜は咲いたか」と言った。母は裏の桜の木の下へ急いだ。花びらが散り敷いていた。花が二つか三つ残る枝先を手折り、手のひらに包んで戻り、舅の顔にかざした。目が花を捉えて「あぁ」と、声を立てて頷いたそうだ。
母に何か、こうしたいという事があれば、知りたい。このところ、私は隔日に面会に来るが、何をしようかと、思いあぐねている。母の呼吸は、しゃくり上げるような息継ぎだ。
母に伝えたい事が一つある。
いつも足湯をすると、母は「あったかいなぁ、ええ気持や」と、言う。足湯の間に、私は伝えた。
「母さんは、よう働いてきた。偉い。毎日、孫三人の夕ご飯を作ってくれた。豆腐屋さんから、厚揚げやら蒟蒻やら竹輪買（こ）うて、ご飯を作ってくれた。私は、母さんの娘であることを誇りに思うてる。母さん、おおきに」
母は泣いてしまった。消灯時間になった。母を床に入れ、
「またあしたも来るし」
と、握手をした。母は強く握り返してきた。

（評）盲養護老人ホームに入所した母と、娘の心の絆が伝わってくる。ホーム周辺の風景や施設内の見学の様子、母の発熱、舅の桜に纏わる思い出などを織り込み、母の人生が個性的な感性に富んだ表現で描写される。最終段で母に足湯させながら語りかける場面に、余韻が残る。

特選

難儀だけれど

甲良町
上野初子

田舎の長男の家に嫁いだ私にとって、盆や正月は、例えるならば「難儀」の一言に尽きた。都会で暮らす次男の家族を迎えることが、嫁の身には少なからず重荷であったこと、間違いない。

そんな私にも、唯一気持ちの支えになっていたことがある。それは、「客をなんとか持て成したら、その後は高月へ帰れる」というささやかな楽しみ。だからといって、実家の両親が、「辛い思いをしてまで、嫁ぎ先で辛抱する必要はない」、などと甘い言葉を掛けてくれた訳ではないのだが。

あれは何年前の盆だっただろう。記憶を辿れば、私がまだ随分若かった頃のことのように思う。

電話で、次男の家族がやって来る、という連絡を受け、義母は喜び勇んで私に告げた。「あの子らにご馳走をしてやって」と。義母のいうご馳走とは、だいたい定番で、私に催促している内容を悟ることは容易だった。それ故に、「またか」という思いで落ち込んだことを覚えている。

さて当日、私は普段よりも気を張って、早起きの義母よりも更に早く起きた。そして、そそくさと準備に取り掛かった。

まず、昨晩より水に浸しておいた餅米をガス釜に入れ、火をつけた。それと同時進行で、既にご飯が炊けている炊飯器の蓋を開けた。そのご飯で、前日に煮ておいた具を混ぜて五目飯を作った。上手にはできなかったが、自分なりに納得はできた。しかしながら、思うように捗ったのはここまでである。

次は御萩を作らなければ…と、炊き上がったばかりのガス釜の蓋を開けた。すると、どうしたことだろう。餅米は、なんとか炊けてはいるが、その上に一センチ位の深さで湯が溜まっているのである。

私は、その時初めて餅米の水の量が多すぎたことに気が付いた。しまった、と慌てたが、こんなことが義母に知れたら大変。只でさえ世間知らずで出来の悪い嫁なのに、これ以上に綻びを大きくしたくない。そんな稚拙な思いが先だって、それこそ必死になって考えを巡らせた。

見回せば、五目飯に使ったご飯が少し残っていることに気が付いた。そこで、一か八か、それを餅の中に混ぜ込んでみた。そしたら、幸いにも御萩が作れそうな堅さになった。

そこからは、もう無我夢中。餅を小さく千切っては黄粉を塗し、千切っては塗し…を繰り返す。そして漸く、不揃いだけど御萩らしきものを何個か皿に並べることができた。もちろんその一部始終を知っているのは私だけ。

ああ良かった、と安堵の胸をなでおろしながら、「私でもできるやんか」と自負した。

そんな調子で、どうにか長男の嫁としての役割を果たし、その日の夕方には、実家へ帰らせてもらうことができた。

盆に帰省してきた娘を、両親は笑顔で迎えてくれた。私自身も肩の荷が下りたようで嬉しくってたまらなかった。そして、胸の内をさらけ出した。

「今朝は、四時から起きて五目飯作って、御萩も作ったんやで。私一人が全部やったから疲れたわあ」

リラックスして喋りまくる私の話を母は暫く聞いてくれた。ところが、有頂天になっている私に、母からは厳しい言葉が返ってきた。

「全部一人でやった、なんて自惚れてたらあかん。お前の傍で、神様やら仏様やらが手伝ってくれてやはったんや。お前を助けていてくれやはったんや」

嫁ぎ先であんなに頑張ったんだから、実家では労ってもらえるのが当然、と軽く考えていた私。しかし母には、そんな驕った娘の姿が歯痒かったのだろう。その言葉からは、我が子を心配する親心が垣間見える。

心待ちにしていた盆帰りに、母からの予想もしていなかった叱咤を受け、また少し強くなれたような気がしたものだ。

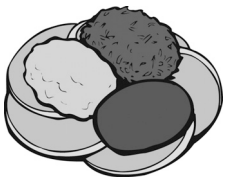
嫁いで三十五年になるが、私が、どうにかこの家にしがみついていられるのは、親の様ざまな教えがあったお陰だと思っている。

特に母が、あの年の盆に伝えてくれたことは、生涯忘れることはないだろう。いつも心の片隅に忍ばせているつもりだ。

そして今年の正月のこと。毎年のことながら、客を持て成すため一生懸命に鋤焼きの具を切っていた。そしたら、私の息子の嫁が、「手伝いましょうか」と、声を掛けてくれた。

「おお、ありがとう、助かるわ」嬉しくて、思わず笑みが零れた。その時思った。自分なりに頑張っていれば、神様や仏様は、ちゃあんと見ていてくださるものだなあ、と。過去に難儀なことと思っていた盆や正月の持て成しも、今となれば、満更でもないこととなりつつある。

（評）田舎の長男の嫁として三十五年、若かった頃の、次男家族をもてなす料理作りの苦労や、今も心に残る実家の母の言葉などが、無駄のない簡潔な文章で綴られる。難儀なことの思い出が語られた後に、息子の嫁の心和む声掛けに接し、明るさが仄見える構成が良い。



入選

タクトの誘い

大藪町
外村輝夫

その昔、一般的にやってみたい職業は「オーケストラの指揮者」か「プロ野球の監督」だときいた。ともに目標達成のために、思いのたけを思いのままあやつり、冥利につきるから、ということらしい。演奏会などで使われる指揮者用の楽譜は、楽器のパーツごとに音符が散りばめられ、ひしめき合う。指揮者は作曲者の意図をくんで、タクトと呼ばれる指揮棒で解きほぐしながら、音を生み出す。

かねがね「音楽のもつ力」は大きいと感じていた。クラシック音楽で心が癒され、日本古来の音楽にも共感を覚えている。音楽は、私のこれまでの生活に溶け込み、必要不可欠である。ジャンルにこだわらず、あるときは軽音楽や吹奏楽、シンセサイザー、さらに歌謡曲やカラオケの演歌まで、その時々の気分で音楽と深い関わりをもってきた。

小学校の音楽の時間、歌うことは好きだった。しかし楽譜がよめず、リコーダーなどを奏でると、メロディーがつながらない。

それからも幾度となく挑戦したが、手軽な楽器ならいつかは奏でられると高をくくっていた。

楽器をあきらめて随分経った、定年退職日。京都から息子が駆けつけた。

「これからは時間があるし、何か新しいことにも挑戦すれば。これは指先も使うから」

差し出した退職祝いのプレゼントは、象の絵が描かれたウクレレと教則本。息子の気持ちを推しはかって、独学で始めたものの回を追うごとに、楽譜の「おたまじゃくし」が泳いで見えた。小学校のいやな想い出がよみがえる。それから十年、象のウクレレは、いまも静かに納戸の棚に眠っている。

強いていえば、「音楽」という世界共通語で、世界の人たちと意思疎通が図れる人がうらやましい。これまでの人生で思い残すことは、楽譜がよめないこと、楽器が奏でられないことである。

現職のとき、東京、名古屋、岡山で通算八年七ヵ月の単身赴任をした。いずれも立派なホールが幾つかある。クラシックに限らず、生演奏に勝るものはない。いまは遠くに出かけないと、生演奏を聴ける機会が少なくなった。出来る限り機会を捉えたいと願ってきた。

「関西フィルハーモニー交響楽団のリラックスコンサート」は、地域に根差した活動を展開してきた。毎年秋、野洲か長浜で聴くようになって昨年で九回目。司会者がステージに立ち、演奏の合い間に交わされる常任指揮者Fさんとの軽妙なやり取りは、クラシック音楽を身近なものに、との思いが伝わってくる。演奏のあいまに行われる「指揮者体験コーナー」も好評で、数年前から一度は体験したいものと思っていたが、これまで手を挙げる勇気がなかった。

昨年十月六日、野洲文化ホールでの演奏会。この日は奇しくも四十五回目の結婚記念日だったので、中央前よりの席を確保した。千人余りのホールは、ほぼ満席。「指揮者体験コーナー」になった。曲目は耳慣れている「カルメン」。模範演奏があって、指揮のコツがていねいに説明され、希望者が募られた。手をあげようか、どうしょうか躊躇する私に、隣にいる妻が気づいた。

「やってみたかったのと違うんか。手をあげればいいのに」

催促するように私の左腕をつかんでうながす。＜どうしよう。いま逃せば生涯できないかもしれない＞と、心に問いかけてみた。覚悟をきめると、もう一度妻の顔を見て、勢いよく手をあげた。手をあげたからには、指名されたいと、右手の指先に力を込めた。ステージまで、ほんの二、三メートルほどなのに、随分遠くに感じた。会場を見まわした指揮者のFさんと目があう。

「じゃあ、その元気なあなたにしましょう」

＜やったぁー＞もう後戻りはできない。ゆっくりとステージにあがってからも、頭の中では「カルメン」の出だしを、何度も、何度も繰り返す。

「二拍子ですから元気よくね。振る前に声に出しても、頭の中ででも『せい、のう』といってから、タクトを振り始めてください」

指揮台にあがる。楽団員の顔はよく見えていたが、あびる視線がまぶしい。目の前の指揮者用楽譜には、音符が、ぎっしりとしるされていた。両手を大きく広げて、タクトを振り始めた。無我夢中だった。演奏が終わると会場から大きな拍手。これまで味わったことがない、すがすがしい気分だった。こんなに胸が高鳴り、身体がふるえるとは、思ってもみなかった。住所と名前と感想を聞かれて、

「もうこれで、思い残すことはありません」

というと会場がどっと湧いた。妻のおだやかな笑顔もよく見えていた。その後、指揮者Fさんと握手をしてステージをおりた。

「結婚記念日の品」タクトは、長さ三十三センチメートル、重さ六グラム。思っていたよりも軽い。タクトの端に巻かれたコル

クを、手のひらで包むと、新たな感動が蘇えってくる。

（評）結婚四十五周年の記念日に、コンサートで指揮をした体験が、臨場感をもって表現されている。楽譜が読めなかった小学生時の思い出や、退職祝いに息子から贈られたウクレレの話など織り交ぜながら、一歩前に踏み出す生き方を示す。筆者の体験した「すがすがしい気分」や感動が伝わってくる。

入選

雪の匂い

芹川町　木村弘和

七十年近くも遠い昔のことだから、若い人達には、お伽噺のように映るかもしれない。

その頃の冬は体感的にも今より寒く、積もる雪の量も半端ではなかった。

暮らしの中の暖房も、炬燵・長火鉢・手焙り火鉢・練炭火鉢くらいで、霜焼けやアカギレに悩んでいる友人も少なくなかった。偶に客があると、慌てて炭火を熾して応対する始末であった。三日も続く雪降りに、深夜、ガラスの小窓から向う屋根の積雪をみて、降りやまぬ雪に家ごと埋もれてしまいはしないかと、本気で心配したこともあった。

長じて、三好達治のこの詩に出会い、その絶妙な表現に感動した。爾来、雪の季節が巡ってくると、この詩と共に、遠い日の記憶がまざまざと甦ってくるのである。

雪　三好達治

太郎をねむらせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎をねむらせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

敗戦間もない小学四年の二学期が終る日、担任のF先生が、私だけ教室に残るようにと言われた。悪さをした覚えもないし、放課後なのに……何だろうと不安な思いで待っていた。というのも、F先生は小柄で兵役こそ免れていたが、風貌から受ける印象とは異なり、何を言っても大声で内緒話からは程遠く、対話の距離感や声量加減には疎いのだ。服装も教員服ではなく、カーキ色の国民服を着ていた。かてて加えて、威厳を示そうとするためか、どうみても不似合いなチョビ髭を生やしていたのである。

当時の男の子には、兵隊漫画が流行りで、「のらくろ」や「チビワン一等兵」等が人気だった。そんなことから、F先生にはチビ連隊長を略して「チビ連」という渾名が上級生から伝わっていた。生徒の悪戯や間違いをみつけると、怖い眼差しで叱りつけるのだが、叱られている間中、生徒の方は神妙な中にもこの渾名が頭を過る。「チビ連」「チョビ連」と呪文のように呟いて凌ぐのだったが、反面、不思議な人気者でもあったのである。

「あぁ、待たせたな、お前の家は、たしか表具屋やったな」「はい」

「これを掛け軸に表装してもらってくれ。この書はな、松尾寺の老僧の揮毫でな、お前には読めんやろうが、目出度い漢詩が書いてある。正月に飾りたいのや」

持ち帰って父に見せると、

「正月には無理やで。軸は乾燥をしっかり入れんと、この時期、中々乾かんでなぁ……強制乾燥しかないが、加減が難しい……」

で、どうにか仕上がったのが、年の瀬三十日の朝だった。「お前持って行ってこい」という。予期してないので戸惑った。

前夜までの雪が残っていたが快晴で、道の雪は融けはじめていて、泥よけに纏わって思うように走れない。略図をポケットに高宮から中山道に出る。国道は往還が頻繁なので、自動車の轍の雪は消えて剥きだしの土道、窪みは泥濘んで、其処をまたトラッ

クが通る。しぶきが飛ぶ。それを避けつつ、漸く湖東平野東西の村里をつなぐ秦川村の縄手に出た。

三つの村を過ぎ、「東出」まで来ると雪が深く自転車は漕げなくなった。辻の角にポストが見える。その並びに雑貨屋を兼ねた煙草店があった。中を覗くと、眼鏡の小母さんが怪訝そうな目で此方を見ている。

「斧磨（よきとぎ）」という村を訊くと次の在所だという。

自転車を預け、風呂敷に包んだ掛け軸を背中に括って歩き出した。雪山が行く手を阻むように迫ってくるし、雪も膝を超えるほどに深く、行人の足跡も消えている。不安な中、やっと、村に入って「斧磨」という道標をみて「ホッ」とした。F先生の家は街道に面していて、割り木を積んだ土塀と、ノッポの松と太字の表札で、たやすく見つかった。

「こんにちは」二度呼ばわると「はぁい」という女の人の声の後に先生が現れた。

「おおー、よぉ来たな一人か？」顔中笑顔で迎えてくださった。日頃目にする先生とは全く異なる表情は意外だった。

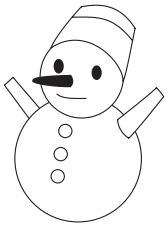
奥さんが持たせてくれた、干し柿の包みを片手に、雪道を折り返す。急ぐうち体が火照って汗ばんできた。喉もかわく。野辺の深い新雪の上にうつ伏せに身をなげた。雪が喉に沁みる。須臾にして、生命の本源のような、なんとも懐かしい匂いが立ち昇って来た。次いで斜陽に輝く銀世界の中、雪を透して空との間に、何かが行き来するような感じが迫ってきたのである。

帰途、高宮の無賃橋を渡り町の灯が見えてきた時、より明るく皓々と寒月が冴えて、雲間を泳いでいたのを印象深く憶えている。

時を経た去年の暮れ、雪の土手を歩いていた時、不意にあの匂いを嗅いだのである。

七十年経っているのに同じ匂いが蘇る。時を分ける「去来今」は抽象であって、生身の感覚には「今」しかないのではないかと、この事象を訝っている。

（評）七十年近く前の少年時代に、F先生宅へ表装掛軸を届けた思い出が綴られ、雪道に難渋しながら進む少年の姿を彷彿させる。その時に体感した雪の匂いが、長い時を経て不意に甦った経験が描写される。が、本題の「生命の本源のような懐かしい匂い」が伝わってこないのが惜しまれる。



入選

よりみち

開出今町　掛田洋子

今年は三月も終る頃になってようやく春らしくなってきた。

先日、久しぶりに公園を歩いていると、『♪胸のボタンひとつはずして～』と、唄う声が聴こえてきた。

「ん？」その声を辿って行くと、公園のはずれの少し小高くなったところにあるベンチに腰掛けて、ギターを奏でながら唄っている男性に出くわした。

「大塚博堂ですね」と、声を掛けたら、

「あぁ、大塚博堂ご存知でしたか」と。

「えぇ、ファンなんです」と、言うと、

「若い人は知らないらしいですよ、今もこのお兄さんに『めぐり逢い紡いで』を唄ったのですが、知らんと言うんです」

学生らしき男性が向かいのベンチに座っていた。私がベンチの端っこに腰掛けると、助け舟が来てくれたとばかりに立ち去って行った。

「私、フォーク・ソングが好きで、その中でも大塚博堂のカセットテープは擦り切れるほど聴きました」

「じゃあ、これもご存知でしょう」と言って、『ダスティンホフマンになれなかったよ』を唄ってくれた。唄い終った彼に私は大きな拍手をした。

大塚博堂は、若くして亡くなっているので知っている人は限られている。ましてや、私のような八十近いお婆さんがフォーク・ソングファンというのもめずらしい。

ギターを抱えなおして彼は『見送った季節のあとで』を、つづけて唄ってくれた。

「まるでライブコンサートへ来たみたい、それも私ひとりだけの！」

「うれしいです。家で唄っていたら、近所迷わくになるから止めてくれと言われているので、少し暖かくなってきたので今日は公園で唄っているのです」と、彼は少し首をすぼめながら言った。

美しい透明感のある唄声は、井上陽水にも匹敵する声量で、手にしているギターも学生がお小遣いを貯めて買ったような代物じゃないことはわかる。

「何処かでライブでも？」と聞いたら、

「趣味仲間が集まって、月に一度ほど関ヶ原にあるライブハウスというか、喫茶店の中ですがね、唄っています」

「でしょうね、声量がプロですよ」

話題が、『帰って来たよっぱらい』の、きたやまおさむに及んだ。

何だろう、この居心地のいい会話は。先刻会ったばかりの、名前も、年齢も、ましてや何処に住んでいる者なのかも分からない二人なのに。

先日、久しぶりに精神科医の北山修氏にお目見えした。といってもテレビのトーク番組でだが。二夜にわたって、ザ・フォーク・クルセダーズの結成当時の経緯や、いきなりメジャーデビューしてしまった戸惑い、内科医のお父さまの反対が強かったことなどを話されていた。

『帰って来たよっぱらい』を初めて聴いたときは何てへんてこりんな歌なのだ、と思っていたのだが、作詞した頃はベトナム戦争、大学紛争、内ゲバといった背景があり、ユートピア思考が強かった、と言われ納得した。

お顔がアップになったとき、ああ、お母さまにそっくりだ、と懐しい気持になった。

その昔、実家の近くに『北山医院』はあった。北山先生は温厚な人柄で、町内の人たちみんなに慕われていた。よっぽど深刻な病気でないかぎり病院へ行くことはなく、少々の火傷や切り傷はもとより、心の病なども先生に話せば、いつのまにやら癒やされていた。

実家の父は大酒呑みで肝臓が悪く、いつも先生から注意されていたのに一向に酒量を減らそうとはせず、週に一度は往診をしてもらっていた。父から通院することは一度もなく、わざわざ家へ来てもらっているのに、診察が終ると、「先生、一杯いきましょ」と言い、母に燗酒を持って来させて「ま、先生よろしいがな一杯ぐらい」と、強引にすすめる。最初は先生も「これから午後の診察もあるので」と、断りつつも、何せ先生もお酒の好きな方だから、ついつい断りきれずに「そうですかじゃあ一杯だけ」と言いつつ、楽しい酒宴になるのが毎度のことだった。

奥さまは女優の久我美子さんに似た細身の美しい人で、近所雀は「あの小太りで赤ら顔の先生にはもったいないわ」と囁やいていた。

暖かくなってきたとはいえまだ三月。夕方になると冷えこんできた。

帰りぎわに彼は、南こうせつの『夢一夜』を聴かせてくれた。

「又、お会いできたらいいですね」と言って別れた。散歩コースのよりみちに、愉しい落し穴が待っていた。

（評）公園でのギター唄との出会いから初めて会った若者との会話をうまく運び、フォークソングに纏わる思い出を回想する。焦点を絞っているのが良い。若々しい精神をもって日々を生きる高齢筆者の、ある日の一コマが描かれ、予期せぬ邂逅を喜ぶ締めが効いている。

入選

よみがえった休耕田

佐和山町
松本澄子

五月下旬にさつまいもの苗を植えた。油粕を撒き左右の土をかきよせ畝（うね）を作り、黒マルチで覆う。

食の生産者は、常に消費者の舌に最高の味を届ける事に懸命であり、品種の改良に改良を重ね今一番人気の高い「なると金時」を三畝に百本植えた。近年、芋の苗は高く別の畑で育てている芋の蔓から出た茎を切断し、さして植える栄養繁殖であり、このような農業技術は後継者に継承してほしいと強く思った。

十月下旬に黒マルチと土を持ち上げ、裂けた土から太い強靭な芋の蔓が四方八方地面に根を下ろし、引っ張ってもびくともしない成育にびっくりした。永年、芋作りをしている私には蔓が太ければ土の中の芋も比例して大きいのがわかり、わくわくする。メキシコが原産のさつまいも、芋苗の植付が一ヶ月遅いので心配していたが、今年の夏は猛暑が続き四季の国から二季の国に移動したような錯覚さえ覚えた程暑かったからであろうか。

芋の茎を切ると切り口からねばねばした白い液が出ている。多分、これは澱粉であろう。

黒マルチを丁寧にめくり、渾身の力で白く乾いた土の中の芋をよけ鋤（すき）を落とすと赤い芋が、土と一緒に掘り起こされた。暗い土の中から掘り出された太った芋は、眩しいばかりの太陽に驚いているようだ。

もう少しで十一月というのに流れる汗を作業着の袖で拭いながらふっと辺りを見渡すと、目の前に佐和山の稜線が、青い空の中に一際高く見えた。

常に農民を大切にし親しまれ愛された石田光成、秋の豊穣の収穫と平穏な暮らしを祈っていたに違いない。今、眼下に広がる荒廃の田圃を見、なげき悲しんでいる事であろうと思いをはせた。

今年は、収穫という期待はせず初めての芋作りという挑戦の気持であった。一反近い畑を守っている私には、手のかからない芋作りに目をつけ、黒マルチで畝さえ覆えば草は生えず、しかも太陽の吸収も良く一石二鳥でもある。全て収穫するのに日もすがらかかり、ダンボール十杯の芋の山に笑いが止まらなかった。田畑は、無限の力を秘めているのだとつくづく感じ、ありがたく思った。

その時、大関松三郎氏の「畑うち」と題した詩の一部が思い出された。

たがやせば　畑から宝がでてくるのだ
汗をたらせば　宝になって
生まれてくるのだ・・・

私の今の気持を詠んでいるのではないか、芋が輝いて見えうれしくなった。

四十三年間の耕作放棄田は、雑草に占領され太い草の根出しとつる草の除草との戦いでくる日もくる日も私を苦しめ続けた開拓の日々を、そして、根が活着する一週間の朝夕の水やりを全て忘れさせてくれた。

その夜、夢にまで登場する芋の山。好物は「大学いも」という孫の隆晴君に一番に届けてやりたい。フウフウと息をかけて「うまい」と云いながら、目を細めて食べる孫の顔が目に浮かび温かい気持になった。

今年は、猛暑で畑での芋作りはダメだっ

たと嘆いていた隣人にも、友人にも届けてやりたい。芋は、多量の澱粉や糖類、カロチンも含有し、少量の脂肪も含まれるようで戦時中は、田舎でも貴重な食糧であったのが理解できる。食物繊維も多く腸の掃除にもなる芋は、青木昆陽が全国に広めたと記憶している。

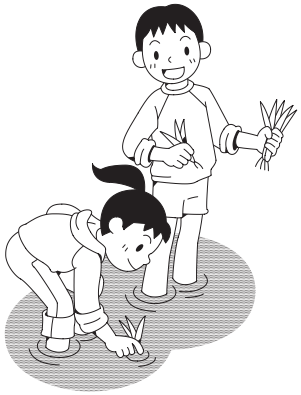
芋は、土を選ばずしかも、連作を好み農業初心者向きで栽培が比較的簡単であるのがうれしい。

昭和四十五年に導入された減反政策、コメの価格を維持するために政府があみだした減反政策は、田を減らし耕作者の意欲をそぎ後継者も育つ事なく、唯、田の荒廃を進め今、放棄田は全国で四十万ヘクタールに及ぶという。五年後には、減反政策廃止を政府は打ち出している。農業は、国の基幹でありその時容易に元の田に戻すためにも荒廃だけは、何としても回避したいと強い覚悟でいる。

耕作放棄田という長いトンネルの闇からぬけ出して芋作りで目醒め、食物の宝庫として再び光を当てられた。自然からの尊い贈りものに感謝しつつ、歳も忘れ来年は、この五アールの田園を芋、芋で一面緑にうめつくしたいとあつい思いにさせられた。

その夜、アツアツの黄色いふかし芋を一口食むと、ほんのりとした甘さが口の中一ぱいに広がり、舌は思い切りよろこぶ至福のひとときであった。

（評）五年後の減反政策廃止に向けて、筆者は田の荒廃を回避したい強い覚悟をもって休耕田に取り組む。土の耕し、芋苗の植付け、豊作の収穫、芋が好物の孫のことなど、農の苦労と喜びが綴られる。田畑は無限の力を秘めている、という筆者の思いが基底に流れている。



佳作

父と酒

大藪町　脇坂修身

佳作

腕時計

芹橋一丁目　楠亀美恵子

佳作

私のカラオケ人生

大藪町　雨森昭夫

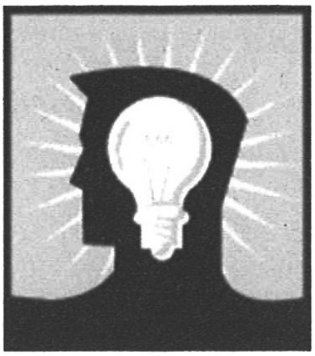
佳作

三冊の絵本

後三条町　三宅春代

《総　評》

応募作品の内容は多彩なテーマで、それぞれ筆者が日々の暮らしの中からさまざまな出来事を掬い上げ、その心情を表現されていた。ひたむきに生きてきた人生の追想や回顧は、そこに留まらず、それを踏まえて現時点での自分の考えや、未来に向かっての思いを書くことに繋いで欲しい。

翻って、東日本大震災から三年余が経過した。復興に向けた諸々の場面で、美醜善悪を内包する「人間の真実」が如実に現れるのを垣間見る。身辺を鑑みるに、私達は各自が日々の暮らしの中で「人間の真実」に直面する。それをどう表現するか、取捨選択しながら自分の思いを伝えようと努力する。読者は作品に込められた筆者のメッセージを共有し、自分の「生」を顧みる。そういう相互作用の媒体として「彦根市民文芸」を位置づけ、共に良い作品を書き続けたい。

山口育子